

タンカンの時期別摘果が果実肥大および収量に及ぼす影響

比嘉 淳・金城秀安 (沖縄県農業試験場名護支場)

Atsushi HIGA and Hiseyasu KINJOU : Influence of Fruit Thinning on the Fruit Growth and Quantity in Tankan

沖縄県の特産果樹の一つであるタンカンの栽培面積は約230ha、結果樹面積で約140ha(平成6年度)、生産量は約2000t、平均収量は1.3t/10a程度である。また、隔年結果が激しく、表年には小玉果の多いのが現状である。しかし市場では2Lサイズの果実が最も高値で取り引きされていることから、評価の高い大玉果の生産を行わなければならない。そこで摘果時期を変えて大玉果生産の可能性について検討した。

1. 材料および方法

本試験は沖縄県北部の農家園場で、当年度の着果過多樹7年生タンカン‘垂水1号’を供試した。試験区は6月摘果区、7月摘果区、無処理区の3区とし、摘果方法は樹全体を間引き摘果した。両摘果区の粗摘果の時期はそれぞれ6月5日、7月7日、仕上げ摘果は両区とも10月に行った。無処理区の粗摘果および仕上げ摘果は行わなかった。粗摘果の程度は50~60枚/果に合わせ、仕上げ摘果は100枚/果程度に合わせた。葉数および着果数の調査を1995年6月2、3日(粗摘果前)に、7月25日(粗摘果後)に、1996年1月17日(仕上げ摘果後)に行った。収量調査は1996年2月6、7日に行った。

2. 結果および考察

粗摘果前の着果数は、いずれの区でも200個程度と著しく多く、葉果比は30枚程度と低かった。いずれの摘果区も粗摘果、仕上げ摘果後の葉果比は100枚程度であったが、無処理区では50枚程度であった(第1表)。

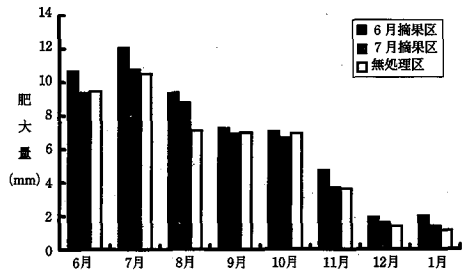
果実の横径は2次生理落果が終了した6月初旬頃から11月下旬まで顕著に肥大し、その後は緩やかな推移を示した。特に6月摘果区は他の区に比べて肥大が良好であった。いずれの処理区でも7月で肥大量が最も大きく、次いで6月、8月の順であった。逆に最も小さい時期は1月であった。6月摘果区の肥大量は他の処理区に比べていずれの月でも大きく、特に、6、7月においては6月摘果区と他の処理区間で約2mm程度の大きな差があった(第1図)。

1樹当たりの階級別果実数は、いずれの摘果区もLサイズ以上が多く、無処理区ではMサイズ以下が多かった。各処理区間の総収量の差は判然としなかったが、1樹当たりの階級別収量については、無処理区に比べていず

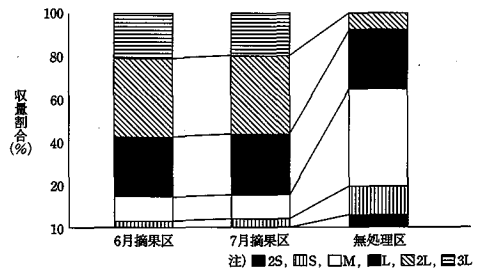
れの摘果区もLサイズ以上の収量が著しく多く、Mサイズ以下が極めて少なかった。逆に、無処理区ではMサイズ以下の収量が著しく多かった。

1樹当たりの階級別収量割合については、無処理区では全体の約60%がMサイズ以下で占められていたが、6、7月摘果区も全体の約90%をLサイズ以上で占めていた。また、6月摘果区は7月摘果区に比べて2Lサイズ以上の割合が増える傾向が見られた(第2図)

以上の結果より、沖縄県においてタンカンの果実横径肥大が盛んな時期は6、7、8月である。特に、6月摘果は初期肥大期の7月に最も果実を肥大させるため、他の処理区よりも収穫時点での果実横径が大きくなる傾向であった。さらに、他の処理区に比べて2Lサイズ以上の果実が増える傾向であった。このことから、6月摘果は果実肥大と大玉果生産に有効であると思われる。また、摘果することによりLサイズ以上の果実が著しく増えるが、総果実数が少なくなることから収穫労力の軽減にもなる。



第1図 月別果実横径肥大量



第2図 1樹当たりの階級別収量割合

第1表 1主枝当たりの摘果前後の着果数および葉果比

	着果数			葉果比		
	粗摘果前	粗摘果後	仕上げ摘果	粗摘果前	粗摘果後	仕上げ摘果
無処理区	200.7	198.14	165.96	38.7	39.2	46.8
6月摘果区	262.5	147.00	98.63	36.9	36.9	98.2
7月摘果区	236.0	135.90	90.78	37.2	37.2	96.7